

令和7年度

鹿児島県の教育

6月号



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会長

森 園 守
鹿児島市立明和中学校長

居たい 行きたい やつてみたいを
叶える学校づくり

新年度の始まりは、新しい学年や学級の出会の中で、夢や希望を膨らませ意欲に満ちた生徒の姿を見ることができると期待を込めて迎える。特に入学式は、生徒たちにとって新しいスタートを切る特別な瞬間であり、多くの生徒は期待と不安が入り混じった気持ちでこの日を迎える。

この四月、県内初の夜間中学となる県立いろは中学校の入学式に出席した。そこで新入生の代表者が、「これからの学校生活が楽しみで仕方ありません。新しいことに挑戦し、たくさん学ぶことを学びたい。」とあいさつされた。その言葉に、新たな学びへ踏み出した強い決意を感じるとともに、学校は生徒の期待に応えるべく責任を果たしていかなければならない場であるということを再認識した。

学校は、様々な教科を学ぶだけでなく、子どもたちが自立して社会で生き、豊かな人生を送るための基礎を築く場であることは言うまでもない。その中で、子どもたちが安全で安心して、自分らしくいられ成長することができると感じる場であることが求められる。

学校教育においては、「個別最適な学び」や「協働的な学び」をより一層充実することで、「誰一人取り残さない学びの保障」に向けた多様

な学びを確保していく必要がある。そして、私たちは、子どもたちが楽しみに通いたくならない「魅力ある学校」をつくっていかねばならない。文部科学省における「魅力ある学校」とは、「児童生徒が主体的に学び、学校生活を積極的に楽しむことができる学校、そして、保護者や地域住民が信頼を寄せ、学校と地域が一体となって教育を推進する学校」としている。その中で、自己肯定感や自己有用感を高め、子どもが本来もっている主体性や創造力を十分に発揮して社会で活躍していけるよう、子どもの成長をサポートする学校環境（居場所）が求められている。

学校は、子どもたちと未来を語り合える場所であり、教師は、人を育てる最高の職業である。教育を取り巻く環境が急激かつ複雑に変化する時代、教師はたゆみなく新たな知識や技能を学び続けなければならない。そして、私たちは、必要な改革を躊躇なく進めながら、「令和の日本型学校教育」を担う「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、皆で知恵を出し合い、協力し、どの学校も、未来の社会の創り手である子どもたちにとって、「居たい」「行きたい」「やってみよう」を叶える学校となることを願っている。

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	12
随想	2	読書案内	14
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	専門部だより	19
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

令和7(2025)年6月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



随想



仮面

鹿児島大学大学院教育学研究科 廣瀬 真琴
准教授

甲突川の桜並木は、今年も美しく、鮮明に蘇らせてくれる。中学校の入学式後、見知らぬ同級生たちに囲まれた教室。窓越しに見たグラウンドに咲き誇る桜の木々に、思わず心奪われたあの瞬間を。スマホどころか携帯電話もない、カメラといえは使い捨てのそれが主流。そんな頃に見た景色である。だからこそ、深く心に残っているのかもしれない。

記憶というのは不思議なもので、桜と共に、次々と、とある友との思い出が教室の風景と共に脳裏に浮かぶ。中学一年生になって半月ほど経った頃。緊張感漂う朝の会。たまたま座席が前後だったことが縁で出会った友。そんな友が、教師からお叱りを受けた。教卓の前で。

「さぞテンションが下がっているだろう……どうやって励まそうか……なんて声を掛けたいだろうか……理想的な友を演じたいからに向かってくる友の足取りは、不思議と軽かった。座席に腰掛けながらこちらを見た彼は、いたずらっ子よろしくにやりと笑い、小声で囁いたのだ。「叱られちゃった」と。

視線を感じて、慌ててわざとらしく咳き込みながら、平静を装うのに必死だった。こんな様子で、友は常に自由だった。教師に叱られたとしても、褒められたとしても、捉われはしない。左右されない。それが羨ましくもあり、寂しくも怖くもあった。今思えば、彼の隣で友の定義を問い直し続ける日々は楽しくもあり、少し苦しくもあった。理想的な友を演じることができない。そんな日々だったから。

失恋、部活での惨敗、成績の驚くほどの低下。不運なこともある。まさに青春時代。クラスが分かれ、久しぶりに再会したある日、「努力が足りなかった」とこぼした自分に、彼が伝えてくれたことがある。割と強めに背中を叩きながら。

「何言ってるの？すげーよ、お前は！」

確かに、部活に勉強にと、寝る間を惜しんで努力した。でもそれは、とどのつまり仮面を被るためのものだったらしい。誰かにとって理想的な己であるための努力は、成功という結果によつてのみ満たされる。満たされぬ努力はすべからず不十分で無価値である……そう自己評価していたことに衝撃を覚えた。何のことはない。誰よりも自分が、努力してきた己の価値を認められずにいたわけだ。

略歴

平成十九年三月 大阪市立大学後期
博士課程修了
平成二十三年四月 鹿児島大学教育学部
着任
平成二十九年四月より現職

友の言葉でそう自覚して、少しだけ笑えた。でも、心から。

多様な価値観、生き方がある。だがどうやら、誰かから認められることを目的として生きるのは、自分には苦しい選択らしい。そう気づいてから、ずいぶんと息がしやすくなった。

研究者となった今、成果を挙げることを求められる日々ではあるけれども、誰かに認められることを目的として研究をしたことはない。でも、不思議なことに、この数年、研究者として県内の学校を訪問する機会をいただき、たくさんの方、行政関係者、子どもたちの声や姿に接しながら、充実した研究活動ができています。努力を見守り、認めてくれる誰かがいるおかげだろう。それは、この上なく幸福なことだと、中学生の自分に教えてやりたい。

今も、帰省した際は決まって友の墓前に立ち、この恵まれた日々のことを伝えていく。時に、彼と大喧嘩した思い出話を花を咲かせつつ、桜のごとく儚く過ぎた日々を思い出す。ひよつとしたらそのお陰で、今も仮面を被らずに済んでいるのかもしれない。

そして、そんな自分だから、こう願うのだろう。子どもたちにも、学校関係者にも、過度に仮面を求めぬ社会であるようにと。



「創立百五十周年」何をすれば幸せに

笠木小(隅) 西 蘭 咲 子

一 はじめに

わたくしたち曾於市民は先人から受け継いだ貴重な遺産や豊かな自然の恵みに感謝し市民一人ひとりが生命の鼓動を感じるまちを目指してここに市民憲章を定めます

- (一) わたくしたちは 活力に満ちた元気なまちにします
- (二) わたくしたちは ころる豊かな学びあいのまちにします
- (三) わたくしたちは ゆめ広がりころるはずむまちにします
- (四) わたくしたちは たがいを思いやる優しいまちにします

市長研修会等で、「市民憲章」を唱和する度に、校長として任された重責を感じる。本校の教育目標は、「自他の幸せのために学び続ける児童を育てる」、今年度創立百五十周年を迎え、「未来につながれ笑顔あふれる笠木小百五十年の歴史」を記念事業スローガンに掲げている。児童や教職員、保護者や地域の皆様と、本校の伝統と校風が今日まで引き継がれていることに感謝し、幸せな時間

を共有できることが楽しみでたまらない。

二 「笠木塾」について

笠木小学校や笠木校区の歴史を全校児童や卒業生と学び合う「笠木塾」(生活科・総合)を通して、先人たちの努力や知恵に感謝する気持ちを育てたい。

- 笠木塾Ⅰ「笠木小学校のあゆみ」
講師 旧教諭(昭和三十九年四月～四年間)
- 笠木塾Ⅱ「笠木原開田にかける思いと未来」
講師 笠木地区土地改良区理事長
- 笠木塾Ⅲ「山形県鶴岡市とのつながり」
講師 大隅あつみ会会長

三 「校区合同大運動会」について

今年度、第七十九回校区合同大運動会を迎える。本校児童は遊びが大好きで、登校してすぐ校庭でおにごっこを始め、いつの間にか全校でしている。友達と競い合い様々な運動に一生懸命挑戦する。そのため、新体力テストでは、全国平均も大きく上回る。

児童も保護者や地域住民も体育的活動で大はしゃぎする大運動会は、皆にとって特別な行事である。創立百五十周年記念行事として、

「百五十チャレンジ」と題した種目を皆で考え、幸せな時間を共有したい。

四 「学習発表会」について

「笠木塾」で学び合ったことを全校劇として、保護者や地域の方々に披露したい。

大正十一年に偉大な先人たちが延長約九キロメートルの用水路工事を行い、笠木原台地に水を引き水田を開いた。当時の人々の暮らしや考え方を劇化することで、児童に先人たちの願いや努力を体感してほしい。それが正に、「曾於市民憲章」にある「先人から受け継いだ貴重な遺産や豊かな自然の恵みに感謝し」ということになる。と考える。

令和四年には、絶え間なく水を送り続けている用水路を利用して「地球環境に優しい水力発電所」が完成した。先人たちの偉業に感謝しつつ、地域活性化・SDGs・脱炭素社会実現に向けた笠木土地改良区の取組は未来につながるものとして、児童に誇りをもつてほしい。児童との台本作りが楽しみである。

五 おわりに

本校は、花牟礼八兵衛氏が猫塚の自宅で読み書きを教えられた「猫塚塾」から始まり、明治九年「初代大津十七校長」、笠木原開田を提唱された「第十一代 越智鼎三校長」。そして、創立百五十年という記念すべき令和七年度、私が校長を任された。重責を担えるかなど考える間もないほど、どんなことをしたら児童はもちろん、皆が笑顔になるか、幸せか考えている。それが楽しい。「皆で愛デアを出し合い、幸せな時間を創り上げるぞ。」



学校のあるべき姿とは？

加世田常潤高 瀬 口 知 子

一 学校の風景

「中学校の頃は、ストレスがたくさんあった。今（高校）はストレスが全然ない。生理まで順調になった・・・。」この言葉は、中学時代にずっと別室登校だった新入生が先日養護教諭に語った内容である。

新学期が始まり二か月が経過しようとしている。本校は、新入生全員にスクールカウンセラーの面談を一学期中に行っている。小規模校だから実施できることであるが、生徒の多くは中学時代に不登校であったり、特別な配慮を必要としたりする生徒である。通級も行っている。教諭等による教育相談も定期的に行うが、年度当初に生徒の情報共有を職員研修で行い、教職員が一体となり、それを踏まえて、授業や特別活動で関わるのが大切であると考える。前述の生徒は中学時代に何があったか詳細は不明だが、教室に入れない理由は様々で、その解決も難しい。本校でも、そうならない確証はないが、本校で学びたいと目標をもち入学してきた生徒一人ひとりと適切に向き合えるような体制づくりを努めている。そうしたことの成果なのか新学期から今まで、ほとんど欠席がない。当たり前のことであるが非常に喜ばしいことであると感じている。また、私は時間があれば、授業を見

て回るが、生徒たちが苦手であろう普通教科ほど顔を上げ、タブレットを使い、眠らず、発言したり、時には楽しげに取り組んだりしている。教員個々の努力によるところが大きいが、私もこんな授業だったら、分かりやすいなあと感じたりする。先日、地理の授業で「なぜ、日本は沖ノ鳥島の保全工事に何百億もかけるのか？」という問いに、この金額、ピザなら何枚買える？から始まり、排他的経済水域や海洋資源、領域の問題まで討論していた。決して、授業のレベルを下げるだけではない学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」がそこにあると感じた。

二 本校のスクールミッション

今年で創立百周年を迎える本校のスクールミッションは「南さつま市にある農業と福祉に関する学科を有する専門高校として、地域の農家、福祉関連施設などと連携した取組を通して、専門的な知識・技術を高め、積極的に地域に貢献できる人材を育成する学校を目指す」である。生徒たちは、専門教科はもとより普通教科の学習に取り組み、地域に開かれた学校として活動している。今日は食農プロデュース科の生徒が地元の幼稚園児に紙芝居等でサツマイモの植え付けを指導し一緒に実習していた。初夏に植え付け、秋に収穫を

三 高校魅力化と生徒募集

少子化、公共交通機関の減便、私立高校の就学支援金制度（実質授業料無償化）等、いくつかの要因が複合的に絡み合っており、公立高校の生徒募集の難しさが生じている。しかも十五の春に農業と福祉の専門高校を選択することは、コロナ禍を経て更なるイメージダウンがある中全国的にも厳しい状況である。入学してみれば、一人ひとりが主体的に楽しい学校生活が送れ、努力さえすれば進学も就職も夢の実現ができる。

本校は昨年からDXハイスクールの採択校である。特に今年には県内唯一の重点累型プロフェッショナル型である。「最先端の農業と福祉が学べる学校」を合い言葉に農業と福祉が高い等の3Kに、スマート農業と福祉が学べることを特色の一つに本校の魅力化が行えないか。また、生活福祉科は今年、教育課程実践検証協力校に指定された。生徒は少ないが学びの内容で生徒募集に繋がられないだろうか？「どんな学校にしたいのか？」難しい課題はあるが、創立百周年の今年、中学生が学びたい、保護者が通わせたい、卒業したい、生徒が誇れて地域に愛される学校になるように学校が一体となって努力したい。



キラリ輝く隈っ子の育成

隈之城小(北) 久木田 剛

一 はじめに

本校は、昨年度創立一五〇周年を迎えた。校区は薩摩川内市南部に位置し、大型商店の立ち並ぶ市街地と住宅街、農業地域で形成される。本校周辺には、川内南中、れいめい中高や保育園等があり、学校を挟んで鹿児島本線と新幹線が通る。校区人口一万二千人で、地区コミュニティ協議会は、子供対象イベントや登校指導、イルミネーションを行う等、青少年育成に熱心である。昨年度、本校の創立記念に向け、校区全体に祝賀の機運が高まり、学校と地域との連携がさらに深まる中、本年度は児童数七一六名学級数三三二学級。職員五三名で、新たな歴史の一步を踏み出した。

二 学校経営

本校では、これまで子供一人一人がもつ「よさ」に着目し、「よさ」を生かすことを教育活動の基盤に据え、家庭・地域と一緒に取り組んできた。その結果、子供たち一人一人が互いの「よさ」を見つげようと友達へ関心を向け、思いやりや優しさをもつようになり、相手への感謝と自分への自信が生まれ、信頼関係が構築されてきた。これからも、「よさ」の自覚と認め合う活動を継続することで、自

己肯定感や自己有用感が育まれ、生き生きと活動し、笑顔が輝く学校生活につながると考える。また、本市が推進する「魅力ある学校づくり」プロジェクトも、授業・学級・地域を魅力あるものとする中で「自己有用感」を育むことを目標としている。これらより、学校教育目標に「自信と笑顔に満ちたキラリ輝く隈っ子の育成」を掲げ、「質の高い魅力的な教育活動と効率的な組織運営を生かし、子供の「よさ」を伸ばす学校」を経営方針として四つの重点目標を立て、取り組んでいる。

- (一) 確かな学力「子供が主役の授業づくり」
- (二) 豊かな心「キラリ輝く魅力ある人づくり」
- (三) 安心安全健やかな体「健やかな体づくり」
- (四) 家庭・地域と一体となりよさを育む

「地域の誇りとなる学校づくり」

三 主な取組

- (一) 互いのよさを認め合うキラリ活動の実践
 自他の「よさ」に気付くことは、自己肯定感につながることから、友達の「よさ」(「キラリ」と呼ぶ)を見付けてキラリカードに書き、校内に設置したポストに入れ、キラリ委員会で集約・選出し、キラリ集会

で表彰したり、廊下壁面にカードを掲示したりしている。

(二) 「ギフト&トライ」事業の取組

ギフトとは、外部講師を招聘しての特別授業の取組で、発達段階や興味課題等に合わせ講師を選出。(昨年実績から抜粋、トライは省略)

- ・六年 講話「隈之城のまちあるき」
講師 東川隆太郎氏(かごしま探検の会)
- ・五年 体験「リズムコミュニケーション」
講師 森田孝一郎氏(リズムハート)
- ・四年 講話「命の大切さを考えよう」
講師 宮内礼治氏(部落解放同盟鹿児島連)
- ・全校 トークショー「山田先輩に聞こう」
ゲスト 山田孝之氏(俳優)

(三) 県指定研究協力校「読書指導」の取組

「全ての学習の基盤となる資質・能力の一つである『言語能力』の育成」をテーマに、「読解力」から対話等での「思考力」「表現力」につながる能力の育成に取り組んでいる。

- ・家庭・地域と連携(親子二〇分間読書)
- ・職員研修(一人一研究授業の実践)
- ・読書イベント(ビブリオバトル、選書会)
- ・研究成果の発表(オンデマンド公開)

四 おわりに

魅力ある人づくりに努め、一人一人のよさを見付けて、子供の自己肯定感を高めたい。このことは職員も同様で、認め合う中で同僚性も更に高まると考える。また、「子供が主役の授業づくり」に努め、子供たちが楽しく充実した学校生活を送れるよう取り組んでいきたい。



ともに助け合い励まし合う学校経営

東串良中(隅) 上三垣 賢一

一 はじめに

本校は、大隅半島のほぼ中央部東端の東串良町内にあり、白砂青松の柏原海岸や唐仁古墳など、美しい自然や歴史と文化に恵まれた環境下にある中規模校である。東串良町は、人を大切にしている町であるため、校区民の学校に寄せる関心や期待は大きい。本校では、子供たちが夢や希望をもち、それを実現させることができるよう職員一丸となって日々の教育活動に取り組んでいる。

二 学校経営の方針

本校では、学校教育目標を、「学びを生かし、心豊かでたくましく、社会の変化に対応できる生徒の育成」と設定し、家庭・地域社会との連携を図りながら、知育・徳育・体育の調和のとれた生徒の育成を目指している。また、本町では町内にある二小学校一中学校において、施設分離型の小中一貫教育を進めている。小中一貫教育の目標は、「社会をたくましく生きる、『ひつぐらの子』の育成」で、九年を通して、豊かな人間性や基礎・基本を身に付け、自ら学び、自ら考え、主体的に行動

する児童生徒の育成を目指している。

三 目標実現に向けた取組

本校の学校教育目標は、「学習指導の充実(学びを生かす)」「心豊かな生徒の育成(心豊か)」「健康・気力・体力の充実(たくましく)」「家庭・地域社会との連携(社会の変化に対応できる)」としている。目標実現に向けて重点的に取り組んでいることは次のとおりである。

(一) 「学習指導の充実」

令和七年度、本校は、「学習者主体の授業」実現プロジェクト実践校区の指定を受け、職員研修や日頃の授業、小中一貫教育推進事業により、生徒自身が積極的に学び、自ら考え、問題を解決していく授業づくりに取り組んでいる。また、ICTを活用した授業展開の改善を図ったり、終末における振り返りや確認テストを実施したり、授業と関連性の高い家庭学習に取り組みせたりするなど、生徒に確かな学力の定着を図ることを目指している。

(二) 「心豊かな生徒の育成」

本校では、人権教育を全ての教育活動を通して実践し、人権が尊重される学習活動づくり、人間関係づくり、環境づくりに取り組んでいる。特に職員研修では、人権擁護委員を講師に招聘し、講話やワークショップを通して人権意識の高揚と人権感覚を磨く取組を行っている。また、生徒の主体性を尊重した学校行事や生徒会活動等を通して、成就感や達成感を味わわせるとともに、生徒の自己肯定感を高めることができるように努めている。

(三) 「健康・気力・体力の充実」

本校は、南海トラフ地震の影響を受ける可能性の高い地域にあることから、「自分の命は自分で守る」という意識を高める教育を推進し、生徒の安全や健康、防火・防災等に関する危機管理能力の育成を目指している。特にメディアとの接し方については、家庭との共通実践事項を設定し、生徒の健康面や体力面に悪影響のないよう見守りや確認などをお願いしている。

四 おわりに

本校には学校教育目標に併せて、「常に希望に燃え、自分から進んで本気で考え、他の人と助け合い励まし合って、全力を尽くして最後まで成し遂げる」という「ひつぐら魂(スローガン)」がある。この合い言葉を大切に、生徒・職員とともに励まし合い助け合い、困難を乗り越え、成長を遂げていきたい。



小規模校の特性を生かした特色ある教育活動

知根小(大) 上加世田 栄次

一 はじめに

本校は、昭和三十三年に知名瀬小学校と根瀬部小学校との統合によって創立され、今年で七十八周年を迎える。校区内の世帯数は三百三十程度であるが、近年は過疎化・高齢化が進み、児童数は十四名(令和六年度から特認校制度スタート、令和七年度特認生八名)の複式学級(一・二年、三・五年の二学級)である。

校区民は素朴で伝統を重んじ、愛郷心・愛校心に富む教育熱心な風があり、学校の教育活動にも大変協力的である。

二 「地域のよさ」を生かした交流活動

(一) ふるさと体験留学

ふるさと体験留学は奄美市教育委員会の主催事業であり、大規模校の児童に自然あふれる本校で二日間の体験留学をさせ、児童同士の交流を通して親睦を図るとともに奄美の自然のすばらしさに気付かせることを目的に、平成四年から始まった伝統ある事業である。

昨年度は、市内の大規模校三校から六名の留学生がやってきた。朝一番の対面式。

児童たちの歓迎の挨拶や自己紹介から、心地よい緊張感が会場を包んでいる様子がかがえる。対面式の後は各学級に入り、学級活動と複式の授業を行った。間接指導に入る際の教師の指示をしっかりと聞くこと、グループ学習ではガイド役を中心に自分の意見を分かりやすく述べることなど、留学生は複式ならではのよさを体験することができた。

二日間の活動では、本校の特色ある教育活動を盛り込んだ。まずは、三味線と島唄の練習。本校では、総合的な学習の時間等に三味線や島唄を取り入れ、ほぼ全員が三味線を弾くことができる。留学生は慣れない三味線に苦労しながらも、その音色を楽しんでいたようだ。また、シーカヤックや海遊びにも挑戦した。シーカヤックの指導は、地域のシーカヤック経験者や保護者である。

その他の体験活動においても地域や保護者の協力を得なければできないものが数多くあり、皆さんの学校への思いと協力に感謝である。二日間の体験留学を終えた留学

生は、「複式の授業は、自分たちで学習を進めていくのが面白かった。」「初めてシーカヤックにのって楽しかった。」など、全員が小規模校の、そして、島のよさを味わうことができた。

(二) 遠泳大会

本校は東シナ海に面しており、歩いて数分で浜に下りることができる。ここで毎年七月に開催されるのが遠泳大会である。知名瀬の港から有免の浜までの、約一・三キロメートルを三年生以上が挑戦する。学校では、プール開き以降、ほぼ毎日のように放課後練習を行い、大会当日に備えた。

いよいよ本番、チデン(太鼓)が打ち鳴らされ、保護者や地域の方々が大声援を送る中、児童たちは声を掛け合い、歯を食いしばりながら、一時間弱で全員が完泳することができた。児童たちの成就感・達成感は計り知れないものがある。

本活動も、五名の泳者に対して二十名近くの方々が伴泳や救命ボート操者として活躍していただいた。「地域の中の学校」を感じるときでもある。

三 おわりに

豊かな自然や小規模校の特性を生かした活動が本校の特色であり、それは、保護者や地域の協力で成り立っている。今後も連携を深めながら教育活動を進めていきたい。これからも、ふるさとに誇りをもち、貢献したいと願う思いも育んでいきたい。



一人一人が輝く

地域とともにある学校を目指して

大川内中(北) 永田 崇博

一 はじめに

校区は山紫水明の地で、嚴島神社や旧石器時代の上場遺跡等もあり、高川ダム湖畔の桜並木や白木川温泉、上場高原のコスモス園など観光名所も豊富である。校区の自治会数は十五で、全体戸数は二百八十八戸であり、地域の方々がPTA準会員として、本校の教育活動を温かく見守ってくださる。

平成二十三年度から特認校制度を活用している。現在、生徒数は特認生三十三人含む四十一人である。平成二十八年度からコミュニティ・スクールとして、平成三十年度から大川内小学校との小中一貫教育校(上場小とは連携校)として教育活動を展開している。

二 取組の実際

本校は地域が積極的に教育活動に携わってくれる土地柄である。地元の生徒は七人で、特認生の中には豊かな教育活動を希望して通学している生徒も多い。地域と協力して大川内らしい教育活動を展開することはふるさと出水を愛する豊かな心を育てるものと考えらる。

(一) 学校運営協議会の設置と運営

生徒の確かな学びと育ちの実現を目指して学校と保護者、地域との連携をより充実させることを目的に設置している。四つのプロジェクト(文化、健康・安全、環境整備、キャリア教育)に分かれ、各教育活動の支援を担当している。委員が中心となって地域に働きかけ、年間を通して多くの協力を得ることができている。

(二) 地域と一体した豊かな教育活動の取組

棚田での「棚田米作り」と校区にある素材を原料とした「手漉き和紙作り」を総合的な学習の時間に学んでいる。縦割り活動で「つなぐ」を意識させる教育活動として展開している。

ア 棚田米作り

校区内の正現地区棚田で米作りを行っている。生徒の主体的な学びを促すため、生徒リーダーによる企画会議、オリエンテーションを意図的に行わせている。五月の種蒔きから田植え、除草・追肥を経た十月の脱穀に至るまで、地域の方の指導を受け、全校生徒で活動している。

イ 手漉き和紙作り

大川内の伝統工芸であり、平成二年度から復活させ、現在三十五年目を迎えた。昔ながらの工程で行うため、地域の方と職員で念入りな打合せをして作業に入る。生徒は企画会議等を経て、数か月かけて下準備を行う。十二月の紙漉きには、伝統工芸継承者を招き、直接指導いただく。その後は乾燥させ仕上げとなる。

(三) 地域とともにある学校づくり

特色ある教育活動に賛同を得て、年間延べ百五十人を超える地域の方々の協力をお願いしている。全戸数が二百八十八戸であることを考えるとその協力体制は偉大である。主体的な態度を育成するという主旨から「地域のために何ができるか、感謝の気持ちをどう伝えていくか。」を生徒自ら考え、行動する諸活動の推進を進めている。

主な活動内容は、避難訓練時の話し合い活動、独居高齢者宅訪問、災害時を想定した安否確認訓練、地域行事への参加等である。

三 おわりに

本校は魅力ある教育活動が盛り沢山である。未来の社会の創り手となる資質・能力を伸ばし、社会で自立する力を育む教育の推進を図りたい。また、地域と連携・協働するコミュニティ・スクールの更なる強化、地域とともにある持続可能な教育活動の推進を図りたい。最後に地域の方々が生きがいを感じ、地域活性化につながることに貢献したい。

心に残るひとこと



情報は自分で取りにいかない

草牟田小(市) 加 峯 美由紀

「心に残るひとこと」を書かせていただくのは二回目である。前回は、初任校の校長先生から教えていただいた「全体感覚」について書いた。今回は、自分が反省をさせられた「心に残るひとこと」について書きたい。

行政職七年目。職場の上司からの言葉である。学校を離れて七年目の職場は、生涯学習関係の仕事だった。前任の職場も社会教育関係の仕事で、益々、学校現場から離れている時期だった。

学校教育関係の行政職時代、教育委員会からは、様々な公文が送られ、法律等の改正やマニュアルなど教師として知っておかなければならない大切な情報が送られてきた。

しかし、生涯学習関係の職場には、学校教育関係の公文はあまり送られてこず、知らないことも多くなっていた。そんな時、ついつい、「えっ、これいつこんな風が変わったんですか。知らなかった。公文こつちに回ってこないから分らない。」と少々苛立ちながら独り言を言っている時、当時の上司が一言。「情報は自分で取りにいかない」と。はっとさせられた。当時の自分の傲慢さに気付かされたようで、人が与えてくれるものを待っている自分がとても恥ずかしく思えた。

今の時代、情報は様々なところから得られるのに、ただ情報を待っている自分は何様なんだと深く反省をさせられた言葉であった。子供たちには、主体的にと言っていたのに、自分は完全に受け身の姿勢になっていた。

その「ひとこと」を言われてからは、学校教育関係の資料はもろもろのこと、様々な情報を自分から取りに行くことを心掛けた。情報を得る方法も、ネットや紙媒体など。街を歩いていても様々なものが飛び込んでくる。情報は至るところにある。

おかげで、今は仕事だけでなく、プライベートでも充実している。当時の上司に感謝するばかりである。

情熱はあるか

穎娃小(南) 日 高 正 基

私は大学四年の春、小学校の教員になろうと決意し教員選考試験を受験した。初任校は、小学校ではなく中学校で、教員としての生活が始まった。教科指導とともに、陸上部の顧問を引き受けることとなった。陸上競技は無知ではあったが、「自分にできることは何でも挑戦しよう」と、まずは生徒と一緒に走ることにした。体力にはそれなりに自信があったのだが、生徒と共に行った階段トレーニングでは、目の前が真っ暗になりそのまま横になってしまった。その日の練習を終えた後、外部コーチに「先生に情熱はあるか」と尋ねられた。情熱と言われても・・・「今の自分にできることを精一杯やりたいです」と伝えた。「それでいい。生徒と一緒に走り、倒れるまで走り切った姿が生徒には伝わる。その姿勢が情熱である。その情熱を持ち続けてほしい。それが教育では大切なことである」と私は思う」とコーチは話された。コーチは元高校の体育教諭で、陸上競技の指導に関しては論理的で、厳しく、いい加減にする生徒を一目で見抜く一本気な人だった。

私は、コーチとの出会いと体験で、子供たちを伸ばすために必要な厳しさや規律、そして何より自分自身が一生懸命すること、情熱を持ち生徒と共に学び、過程を褒めることの大切さを実感することができた。

異動する度に様々な部活動の顧問を引き受けることになるが、生徒と共に流した汗は、実に清々しいものであったことを思い出す。

ここ数年、学校現場を離れての業務が続いていたが昨年四月から小学校へ異動となり、三十三年前の夢が叶った。昼休みに児童が「校長先生、鬼ごっこして遊ぼう」と笑顔で迎えに来てくれる。私も一緒に走り回るのだが、子供のすばしっこさと底知れぬ体力についていけず、鬼のままであることが多くなる。情熱はあるつもりだが、体力が不足していると痛感している。

我が行いにせざば甲斐なし

栗生小(熊) 原 田 和 典

小学六年の時、全校朝会で「今日中に覚え、校長室に来て一人ずつ読み上げなさい」と提示されたのが、日新公いろは歌「いにしへの道を聞かなくても唱えても我が行いにせざば甲斐なし」。

これまでに通ってきた学校で、何百回と校長先生のお話を聞いたはずだが、唯一この時の講話のみ覚えていた。以来「我が行い」まで至らないことの多い自分への戒めのように、ことあるごとにこの歌を目にした。教頭初任校の近くには、島津忠良公のいろは歌四十七首が彫り込まれた石碑の並ぶ「いにしへの道」まであった。

校長になると、これまで年に数回しか近づかなかった保管用金庫がいつも目の前にある。一番奥にしまっている「学校沿革史」の茶色く乾いた紙をめくると、本校創立の明治十三年より前のことも記されていた。屋久島南西部の決して広くはない集落にもかかわらず、栗生には寺子屋が二つもあったようである。そして、明治二十八年、まだ島内に高等科が一つもない頃、他に先がけて「嶽南高等小学校」が設立された。

九州の最高峰を有する八重岳の南に鎮座する、屋久島随一の学校という誇りにあふれていたに違いない。高等小学校設立の地に栗生が選ばれた理由として、入学希望者が多く、他に抜きんでて向学心が強かったこと、集落の共有貯金から学資を寄付する経済力を有していたこと、この二点が挙げられていた。

脈々と受け継がれた教育にかける先人の情熱は、後に「嶽南魂」と呼ばれるようになり、そこに貫かれる神髄は「自主・創造・向学」のようである。長く栗生で教鞭をとられた旧師は、

「嶽南精神は生きた行であって理屈ではない」と述べている。校長初任のこの地で、「我が行いにせざば甲斐なし」であることを肝に銘じ、「嶽南精神」と共に、子供たちに語り継いでいきたい。

どうせやるなら面白がれ

横川中(始伊) 川 原 啓 司

教員生活も今年で三十六年目を迎えた。うち教頭を三校にわたり十年間務めたが、一年目を振り返ると、教員とは異なる立場にとまどう場面が多々あった。このことは多くの校長先生方も共感していただけではないか。様々な調査物の報告、保護者や地域への対応、朝一番に鍵を開け、最後の戸締りを終え帰宅。雑草の草刈りやトイレの水漏れ、「へびが出ました」の声に駆けつける。学校の何でも屋として、業務は多岐にわたっていた。また、先輩の先生方に、管理職の立場で話することの難しさも感じていた。教頭としての役割の重要さを頭では理解しつつも、心の中では、ストレスをため込んだ毎日を過ごしていた。

そんなある日、愚痴交じりに、同じ町内の先

輩教頭に話をした。すると先輩は「嫌だなと思っ
ていても何の解決にもならんよ。どうせやる
んだったら面白がつてみれば」という言葉を返
してくれた。仕事に限らず、気が乗らなかつた
り、面倒だなと思ったりすることはよくあるこ
と。楽しむところまではなかなか達しなくても、
いったん受け入れて面白がつてみることはでき
るのではないか。先輩の言葉を聞いて、そう理
解した。

以前、ある脳科学者の講演で聞いた話だが、
わたしたちは「楽しいから笑う」と思いがちだ
が、実際は「笑うから楽しくなる」のだそう
だ。お箸を横にくわえて漫画を読んだ時と、何も
せず普通に読んだ時では、くわえて読んだ時
の方が、漫画の内容がむしろ感じるそう
だ。これは、お箸をくわえた時の表情筋が笑つた
時と似ていて、脳がおもしろいと判断するから
そう
だ。つまり、体がスイッチとなつて感情が生
まれるということのようだ。

これでいくと、何でも面白がつてやつてい
ると、脳がだまされて、次第に楽しく感じられ
るということだろうか。実際はそれほど単純で
はないと思うが、今でも、「面白がれ」という
言葉にはずいぶん助けられている。

ある日の校長講話



「伝える」と「伝わる」

星峯中(市) 益 満 裕 美

五月二十五(ニコ)日から六月二十五(ニコ)日まで「いじめ防止啓発強調月間(ニコニコ月間)」です。星峯中でも「学校楽しい」と、「いじめ防止標語づくり」、「ポスター作成」など、いじめ防止に向けた取組や啓発を行っています。また、各学級では道徳の時間に「いじめに当たるのはどれだろう」「あなたはどんな友達・仲間がほしいですか」「いじめのない学級・集団にしていくために、自分の行動を考えよう」などをテーマに授業を行いました。

「いじめ」は、被害者の立場に立って判断されます。具体的には、一定の人間関係のある者から、心理的または物理的な攻撃を継続的に受

け、相手が深刻な苦痛を感じている場合を指します。いじめは絶対やってはいけないことであり、許されるものではないことはわかっています。自分の行動や言動が相手に意図しない方向で伝わり、トラブルになることがあります。そういうトラブルを防ぐために「伝える」と「伝わる」について考えてみたいと思います。「伝える」と「伝わる」は大きく違います。「伝える」とは、自分の考えや物事を、一方的に他方へ受け渡す行為です。主語は自分です。一方で、「伝わる」とは、自分の伝えたい事がきちんと相手に理解を得られている状態のことです。また、その理解は自分の理解と同じでなければなりません。

「伝わる」の主語は「相手」にあり、相手の目線や思考に合わせて伝えることが大事になってきます。同じ出来事を経験したとしても、相手がどのように感じているかはわかりません。一つの物事をネガティブに捉える人もいれば、ポジティブに捉える人もいます。自分の当たり前は、相手の当たり前ではないことに気付くことが大切です。だからこそ、自分の思いを相手に理解してもらうために、相手の考えを尊重することを意識できれば、トラブルは防げると思います。